

小学校の外国語活動に対する大学生と若手教員の意識

— 小学校総合選修の在校生と卒業生を比較して —

佐伯 英人・中田 青空*

The Consciousness of University Students and Newly-qualified Teachers toward Foreign Language Activities at Elementary School

— A Comparison between Current Undergraduates and Recent Graduates of the Elementary School Education Course at Yamaguchi University —

SAIKI Hideto, NAKADA Aozora*

(Received September 24, 2021)

1 研究の目的

2017年3月告示の『小学校学習指導要領（平成29年告示）』において「第4章 外国語活動」（p.173-178）が示され、中学年（第3学年及び第4学年）に外国語活動が導入された。また、「第2章 各教科」の「第10節 外国語」（p.156-164）が示され、高学年（第5学年及び第6学年）に外国語科が導入された（文部科学省，2018）。この中学年の外国語活動、また、高学年の外国語科は、2018年、2019年の移行期を経て、2020年4月から全面実施されている。

田山（2021）では、4年制私立大学教育学部に在籍する小学校教員志望の学生75名（1年生：43名，2年生：32名）を対象として「今後の英語学習への心構えについてどのように考えていますか」や「小学校外国語活動や外国語の授業は、主にだれが担当するのがよいと考えますか」といった「問い」を設定し、選択技法を用いて意識調査を行った。

その「5. 考察」において「小学校で扱う基礎的な英語表現を指導するための知識や運用する技能の習得にとどまらず、自信をもって授業ができるようにできる限りの英語力向上を図りたいと考えている学生は、協力者の68%を占めている。その一方で、学級担任自らが授業を担当すべきと考えている学生は6%に過ぎない。」（p.197）と示されている（田山，2021）。また、「5. 考察」において「協力者は大学に入学したばかりの1年生の割合が多く、小学校外国語教育に関する概論や教育法をまだ履修しておらず、学習指導要領を目にしている学生もほとんどいないことが予想される。大学入学前の

ように、英語学習者として英語学習を捉えることは現実的にできていても、英語学習指導者としての視点はほとんど備わっていないと言える。」（p.197）と示されている（田山，2021）。

上記のことは、調査協力者が1年生と2年生であったため、学部学生の意識調査としては不十分であり、解釈に留意する必要があることを示唆している。

文部科学省（2017）の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』には「小学校の先生方からは、やっとな外国語活動の指導に慣れてきたところなのに、また新しいことを始めるのか、外国語活動と教科外国語の違いは何なのか、教科外国語の指導をするのにどのような指導力が必要なのか、英語が苦手なのに、など、新しいものへの不安感と負担感の声が聞かれる。」（p.3）と示されている。このことは、当時、小学校教員の意識に不安感や負担感があったことを示唆している。

前述したように、中学年の外国語活動、また、高学年の外国語科は2020年4月から全面実施されている。本研究では、中学年の外国語活動に対する教育学部の学部学生（3年生と4年生）及び小学校の若手教員（1年目と2年目の教員）の現時点（2020年12月）の意識を調査し、両者を比較した。本研究の目的は、外国語活動に対する学部学生及び若手教員の意識を明らかにすることである。

2 調査の対象と調査の方法

調査協力者は、山口大学教育学部小学校教育コースの小学校総合選修に所属している学部学生（3年生と4年

* 防府市立玉祖小学校

生)及び山口大学教育学部小学校教育コースの小学校総合選修を卒業し、公立小学校で教諭として勤務している若手教員(1年目と2年目の教員)とした。

3年生の学部学生の調査は、主免許である小学校の基本実習が終了した後の2020年12月に実施した。その他、4年生と若手教員の調査も同月(2020年12月)に実施した。

調査方法には質問紙法を用いた。調査方法としては、調査協力者に、紙媒体の用紙で回答する方法とWebアンケートで回答する方法があることを知らせ、いずれかの方法を選択させた。なお、紙媒体の用紙による調査とWebアンケートによる調査の内容は同じである。

質問紙では「問い」を設定し、「各質問項目において、当てはまる番号に○をつけてください。また、そう思う理由について教えてください。」という教示を行い、選択技法と記述法で回答を求めた。選択技法による調査では、2つの質問項目(質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」、質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」)を設定し、5件法(5:とても当てはまる, 4:だいたい当てはまる, 3:どちらとも言えない, 2:あまり当てはまらない, 1:まったく当てはまらない)で回答を求めた。また、記述法による調査では、「その理由」について質問項目ごとに記述欄を設定し、自由記述で回答を求めた。

この他、性別を男性、女性で示し、選択するように設定した。

3 分析の方法

回答者数は65名であった。その内訳は、学部学生(3年生:15名, 4年生:23名)が38名、若手教員(1年目:19名, 2年目:8名)が27名であった。

分析するにあたり、学部学生と若手教員、男性と女性の2変量でFisherの直接確率検定を行った。なお、若手教員の1名が性別について未回答であったため、学部学生38名(3年生:15名, 4年生:23名)、若手教員26名(1年目:18名, 2年目:8名)を対象として分析した。分析の結果、学部学生と若手教員、男性と女性の人数に有意な関連はみられなかった(表1)。このことは、学部学生と若手教員、男性と女性の人数に偏りがみられなかったことを示している。

そこで、本研究において、性別については考慮せず、学部学生(38名)と若手教員(26名)という2つの集団を視点として分析し、議論することにした。

表1 Fisherの直接確率検定の結果

| | 男性 | 女性 | p値 | 有意確率 |
|------|----|----|------|-------|
| 学部学生 | 10 | 28 | 1.00 | n. s. |
| 若手教員 | 7 | 19 | | |

数値:人数

n. s.:非有意

選択技法による調査の回答については「5:とても当てはまる」を5点、「4:だいたい当てはまる」を4点、「3:どちらともいえない」を3点、「2:あまり当てはまらない」を2点、「1:まったく当てはまらない」を1点として、質問項目ごとに学部学生と若手教員の平均値、標準偏差を算出し、天井効果と床効果の有無について検討した。さらに、対応のない検定を実施した。

質問項目①と質問項目②は、得点の値が高いほど調査協力者の意識が良好であることを示している。そのため、天井効果がみられた場合、意識は「良好」と判断し、床効果がみられた場合、意識は「不良」と判断した。

記述法による調査の回答については、記述を読み、その理由が書かれているもの(調査協力者の意識の要因を見取ることができたもの、もしくは、意識の要因を類推できるもの)を抽出した。この時、選択技法による調査をもとに「5:とても当てはまる」と「4:だいたい当てはまる」を「ポジティブな意識」とし、「3:どちらとも言えない」は「ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識」とし、「2:あまり当てはまらない」と「1:まったく当てはまらない」を「ネガティブな意識」とした。この3つのカテゴリー(「ポジティブな意識」、「ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識」、「ネガティブな意識」)ごとに内容の同質性にもとづいて分類し、人数を集計した。類似の内容が複数抽出された場合には、1つの意見に集約した(一方の意見を省略した)。ただし、ニュアンスに違いがみられた場合は個別のものとして扱った。さらに、記述内容について、表2と表3に示した意識の要因をもとに整理した。この意識の要因の整理は「ポジティブな意識」と「ネガティブな意識」の2つのカテゴリーで行った。

表2 ポジティブな意識の要因

| 意識の要因 | 記号 |
|---|----|
| 英語を学習する時期として適切であるなど「学習する時期」が考えられるもの | A |
| リスニング力、語彙力、コミュニケーション力などの力が身に付く、新しいものの見方ができるようになるなど「身に付く力」が考えられるもの | B |
| 英語を好きになる、英語に興味をもつなど「英語に対する感情」が考えられるもの、また、楽しく学習できる、興味をもって学習できるなど「学習に対する感情」が考えられるもの | C |
| 外国語の背景にある文化に対する理解が深まる、異文化について学習するなど「国際理解」が考えられるもの | D |
| その後の学習（高学年の外国語科、中学校の外国語科など）に円滑に接続できるなど「学習の接続」が考えられるもの | E |
| グローバル化が進む中で、英語を使う場面あり、そこで活用できるなど「将来、役に立つ」が考えられるもの | F |
| 授業を参観したり、授業を実践したりする中で良いと思ったなど「教育現場の経験」が考えられるもの | G |
| 経験を活かせる、資格をもっているなど「教員の経験や資格」が考えられるもの | H |
| 英語が得意である、英語力がある、授業の実践力がある、授業ができる、授業をする自信があるなど「教員の指導力」が考えられるもの | I |
| 「その他（A～I以外のもの）」が考えられるもの | J |

表3 ネガティブな意識の要因

| 意識の要因 | 記号 |
|--|----|
| 英語を学習する時期として不適切であるなど「学習する時期」が考えられるもの | a |
| 英語が得意でない、英語力がない、授業の実践力がない、授業ができない、授業をする自信がないなど「教員の指導力」が考えられるもの | b |
| 教材の準備をする時間がない、多忙であるなど「教員のおかれている状況」が考えられるもの | c |
| 「その他（a～c以外のもの）」が考えられるもの | d |

4 結果と考察

4-1 選択肢法による調査

各質問項目において学部学生と若手教員の平均値、標準偏差を算出し、天井効果と床効果の有無について検討した。その結果を表4に示す。さらに、対応のないt検定を行った結果を表4に示す。

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」については、学部学生と若手教員ともに、天井効果がみられず、床効果もみられなかった。つまり、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかったといえる。質問項目①でt検定を行った結果、有意な差がみられなかった。このことから、両者を比較した場合、学部学生の意識と若手教員の意識に明瞭な得点差がみられなかったといえる。

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をした。」については、学部学生と若手教員ともに、天井効果がみられず、床効果もみられなかった。つまり、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかったといえる。質問項目②でt検定を行った結果、有意な差がみられた ($p < 0.05$: 学部学生の平均値 > 若手教員の平均値)。このことから、両者を比較した場合、明瞭な得点差がみられ、学部学生の意識が、若手教員の意識よりも高かったといえる。

表4 選択肢法による調査を分析した結果

| 番号 | 質問項目の内容 | 学部学生 | | 若手教員 | | t検定の結果 | | |
|----|----------------------|----------------|----|----------------|----|--------|------|----------|
| | | 平均値 (標準偏差) | 効果 | 平均値 (標準偏差) | 効果 | df | t値 | 有意 確率 |
| ① | 小学校中学年の外国語活動は必要である。 | 3.84 (1.13) | - | 3.81 (1.06) | - | 62 | 0.12 | n. s. |
| ② | 小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。 | 3.34 (1.32) | - | 2.58 (1.47) | - | 62 | 2.17 | * |

● : 天井効果あり, ▲ : 床効果あり, -, なし

n. s. : 非有意, † : $p < 0.10$, * : $p < 0.05$

4-2 記述法による質問項目①の調査

(1) 質問項目①の学部学生の記述

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」の学部学生の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表5)。なお、表5に示したS1、S2といった学生の番号は表5の中で区別するために付けたものであり、他表の学生の番号と関連していない。

まず、表5の「ポジティブな意識」について述べる。

S1～S15のうち、S1～S6には「幼い」、S7～S9には「低年齢」、S10には「小さい頃」、S11～S14には「早い」、S15には「中学年」という文言がみられる。これらの記述から、A「中学年の時期に英語を学習することを適切とらえていること」を見取ることができる。

S10には「耳が慣れる」という文言がみられる。この記述から、B「リスニング力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

S11には「嫌いにならない」という文言がみられる。この記述から、C「好きになるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S12には「楽しみながら学ぶ」という文言がみられる。この記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S13には「身につけやすい」という文言がみられる。この記述から、B「英語力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

S14には「海外の文化を知ったり」という文言がみられる。この記述から、D「異文化について学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。また、S14には「その先の学びが深まる」という文言がみられる。この記述から、E「その後の学習に円滑に接続できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S15には「楽しく学べた方が良い」という文言がみられる。この記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S16には「英語を勉強するきっかけになりそう」という文言がみられる。この記述には、上記と近いニュアンスがあると思われる。この記述から、A「中学年の時期に英語を学習することを適切とらえていること」を見取ることができる。

S17には「中学校」と「スムーズな接続」という文言

がみられる。この記述から、E「中学校に円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。また、S17には「苦手感を持ってしまう」という文言がみられる。この記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を見取ることができる。

S18には「英語でコミュニケーションをとることを楽しいと感じる」、S19には「異言語でコミュニケーションをとる楽しさを知ってほしい」という文言がみられる。これらの記述から、C「英語でコミュニケーションをとる楽しさを学習できるととらえていること」を見取ることができる。なお、その楽しさを感じるために、前提としてコミュニケーション力が身に付くことが必要であれば、要因としてBが伴うと考えられる。

S20には「子どもの行動力や価値観が変わってくる」という文言がみられる。この記述から、B「行動力や価値観が変わるととらえていること」を見取ることができる。

S21、S22は「これからグローバルになっていく」という文言がみられる。S23、S24には「これからの社会で英語がより必要になる」という文言がみられる。これらの記述から、F「国際化が進む社会の中で将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

S25には「これからの日本のためになる」という文言がみられる。この記述から、J「将来、国のためになる(役に立つ)ととらえていること」を見取ることができる。

S26には「楽しく学習している姿をみてきた」という文言がみられる。この記述から、G「授業を参観して、または、授業を実践して良いととらえていること」を見取ることができる。

次に、表5の「ネガティブな意識」について述べる。

S30、S31には「日本語が確立していないと感じる」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期には日本語が十分に学習できていないととらえていること」を見取ることができる。

S32には「必要性を感じない」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期に英語を学習する必要がないととらえていること」を見取ることができる。

S33には「教員が英語を教えるのは社会とかけ離れており難しい」という文言がみられる。この記述から、b「教員が英語を教える力が十分でないととらえていること」を見取ることができる。

表5 質問項目①の学部学生の記述内容を分類・集計した結果

| 分類 | 学生 | 記述内容 | 人数 |
|----|-------|------------------------------------|----|
| ○ | S1-S6 | 幼いうちから英語に慣れることは大切だと思うから。 | 6 |
| | S7-S9 | 低年齢から英語に触れることが大切だと思っているから。 | 3 |
| | S10 | 小さい頃から英語に触れることで耳が慣れるから。 | 1 |
| | S11 | 早いうちから英語に慣れていての方が嫌いにならないから。 | 1 |
| | S12 | 早い段階から、外国語に触れて、楽しみながら学ぶのが大切だと思うから。 | 1 |

| | | | |
|---|----------|---|---|
| | S13 | 早い段階から学ぶことで、身につけやすいと思うので。 | 1 |
| | S14 | 早いうちから英語に触れたり、海外の文化を知ったりすることで、その先の学びが深まると考えるから。 | 1 |
| | S15 | 中学年のときから時間をかけて楽しく学べた方がよい。 | 1 |
| | S16 | 英語を勉強するきっかけになりそうだから。 | 1 |
| | S17 | 中学校でいきなり本格的に英語学び、苦手感を持ってしまいかもしれないから。スムーズな接続に必要。 | 1 |
| | S18 | 外国語活動は、英語でコミュニケーションをとることを楽しいと感じるチャンスだと思うから。 | 1 |
| | S19 | 異言語でコミュニケーションを取ることを楽しさを知ってほしいから。 | 1 |
| | S20 | 子どもの行動力や価値観が変わってくると思うから。 | 1 |
| | S21, S22 | これからグローバルになっていくと思うから。 | 2 |
| | S23, S24 | これからの社会で英語がより必要になると考えるから。 | 2 |
| | S25 | これからの日本のためになると思うから。 | 1 |
| | S26 | 実習等で子どもたちが楽しく学習している姿をみてきたから。 | 1 |
| □ | S27 | 外国語より国語をしっかり学ぶべき段階だから。 | 1 |
| | S28 | 授業時数が確保できるなら、やった方がいいと思う。 | 1 |
| | S29 | 言語学習のタイミングは本人のモチベーションと継続だと思うのでいつでも良いと思う。 | 1 |
| △ | S30, S31 | 外国語を学習する以前に日本語が確立していないと感じるから。 | 2 |
| | S32 | そこまで必要性を感じないから。 | 1 |
| | S33 | 教員が英語を教えるのは社会とかけ離れており難しいと思うから。 | 1 |

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(2) 質問項目①の若手教員の記述

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」の若手教員の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表6)。なお、表6に示したT1、T2といった教員の番号は表6の中で区別するために付けたものであり、他表の教員の番号と関連していない。

まず、表6の「ポジティブな意識」について述べる。

T1～T8のうち、T1には「早い」、T2には「幼い」、T3には「幼少期」、T4～T8には「中学年」という文言がみられる。これらの記述から、A「中学年の時期に英語を学習することを適切にとらえていること」を見取ることができる。

T2には「楽しさを感じる」という文言がみられる。この記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T3には「外国文化に触れる」という文言がみられる。この記述から、D「異文化について学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。また、T3には「グローバル社会を生き抜く上で必要」という文言がみられる。この記述から、F「国際化が進む社会の中で将来、役に立つととらえていること」を併せて見取ることができる。

T4には「興味をもつ」という文言がみられる。この記述から、C「興味をもつととらえていること」を併せて見取ることができる。

T5には「アルファベットの書き方、文字の形などにしっかりと触れておくことが大切」という文言がみられる。この記述から、B「アルファベットの学習をするこ

とが大切であるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T6には「外国語って楽しい、話せるようになってみたいと思う」、「身近に感じさせることが大切」という文言がみられる。この記述から、C「楽しい、話したい、身近に感じさせることが大切であるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T7には「抵抗感は少ない」という文言がみられる。T8には「外国語へのハードルを高くしない」という文言がみられる。これらの記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T9には「楽しく学べる発達段階」という文言がみられる。この記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」、また、A「中学年の時期に英語を学習することを適切にとらえていること」を見取ることができる。さらに、T9には「その後の外国語に関する学習にもつながる」という文言がみられる。この記述から、E「その後の学習に円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。

T10には「興味関心をもつのはよい」という文言がみられる。この記述から、C「興味・関心をもつことができる」ととらえていること」を見取ることができる。

T11には「高学年につながる」という文言がみられる。この記述から、E「小学校の外国語科に円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。

T12には「大学受験で必要」という文言がみられる。この記述から、J「大学入試のときに役に立つととらえ

ていること」を見取ることができる。

T13には「将来、英語が必要になる」という文言がみられる。この記述から、F「将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

T14には「語彙力の向上が期待できる」という文言がみられる。この記述から、B「語彙力が身に付くととらえていること」を見取ることができる。

T15には「異文化理解につながる」という文言がみられる。この記述から、D「異文化に対する理解が深まるととらえていること」を見取ることができる。

T16には「楽しそうに学習している」という文言がみられる。T17には「外国語の学習を楽しみにしている」という文言がみられる。この記述からはG「授業を参観して、または、授業を実践して良いととらえていること」を見取ることができる。

次に、表6の「ネガティブな意識」について述べる。

T23には「中学校からでいい」という文言がみられる。

この記述から、a「中学年の時期を含めて小学校で英語を学習する必要がないととらえていること」を見取ることができる。

T24には「他に学ぶべきことがある」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期に学習しておくべきことは別にある（外国語活動ではない）ととらえていること」を見取ることができる。

T25には「日本語も十分にできない」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期には日本語が十分に学習できていないととらえていること」を見取ることができる。また、T25には「英語をやることにあまり意味を感じない」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期に英語を学習する必要がないととらえていること」を見取ることができる。

表6 質問項目①の若手教員の記述内容を分類・集計した結果

| 分類 | 教員 | 記述内容 | 人数 |
|----|-----|--|----|
| ○ | T1 | できるだけ早い段階から外国語に触れておく必要があると思うから。 | 1 |
| | T2 | 幼い頃から英語に触れる楽しさを感じることは大切だと思う。 | 1 |
| | T3 | 幼少期から外国語や外国文化に触れることはこれからのグローバル社会を生き抜く上で必要なものであると考えるため。 | 1 |
| | T4 | 小学生の中学年のうちから英語に触れることで興味をもつと思うから。 | 1 |
| | T5 | 中学年のうちに、アルファベットの書き方、文字の形などにしっかりと触れておくことが大切だと思ったから。 | 1 |
| | T6 | 中学年で外国語って楽しい、話せるようになってみたいと思うことや身近に感じさせることが大切だと思うから。 | 1 |
| | T7 | 中学年の方が抵抗感は少ないと思うから。 | 1 |
| | T8 | 中学年で外国語の学習が保障されていることが外国語へのハードルを高くしないのではないかと思うから。 | 1 |
| | T9 | 楽しく学べる発達段階と思うから。その後の外国語に関する学習にもつながる。 | 1 |
| | T10 | 英語に対する興味関心をもつのはよいと思うから。 | 1 |
| | T11 | 高学年につながるのだから。 | 1 |
| | T12 | 大学受験で必要になるから。 | 1 |
| | T13 | 将来、英語が必要になると思うから。 | 1 |
| | T14 | 語彙力の向上が期待できると考えたため。 | 1 |
| | T15 | 異文化理解につながると思うから。 | 1 |
| | T16 | 子どもが楽しそうに学習しているから。 | 1 |
| | T17 | 子どもたちが外国語の学習を楽しみにしているから。 | 1 |
| □ | T18 | ないよりはあったほうが良いと思うから。 | 1 |
| | T19 | 必要であると思うが、漢字など日本語の習得も不十分な時期であるため、難しいと思う。 | 1 |
| | T20 | 日本語も不安なので、それより、日本語を勉強した方がよい。 | 1 |
| | T21 | 4年からでいいと思う。3年は他にも初めての教科が多すぎる。 | 1 |
| | T22 | 学ぶ必要性をあまり感じないから。 | 1 |
| △ | T23 | 中学校からでいいと思う。 | 1 |
| | T24 | 他に学ぶべきことがある。 | 1 |
| | T25 | 日本語も十分にできないのに、英語をやることにあまり意味を感じない。 | 1 |

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(3) 質問項目①の学部学生と若手教員の記述の比較

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」の学部学生と若手教員の記述内容を分類した結果

を比較した(表7)。なお、表7のうち、その他の要因(J, d)については除いて検討した。

表7をみると、学部学生と若手教員では、ポジティ

ブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因（A～I）のうち、すべてで一致していた。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因（a～c）のうち、2つの要因（a, c）で一致していたが、1つの要因（b）で一致していなかった。

表7 質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」の記述内容を分類した結果の比較

| 調査対象者 | ポジティブな意識の要因 | | | | | | | | | | ネガティブな意識の要因 | | | |
|-------|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-------------|---|---|---|
| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | a | b | c | d |
| 学部学生 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | - | - | ● | ● | ● | - | - |
| 若手教員 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | - | - | ● | ● | - | - | - |

記号：表2と表3を参照

●：あり， -：なし

4-3 記述法による質問項目②の調査

(1) 質問項目②の学部学生の記述

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」の学部学生の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる（表8）。なお、表8に示したS1、S2といった学生の番号は表8の中で区別するために付けたものであり、他表の学生の番号と関連していない。

まず、表8の「ポジティブな意識」について述べる。

S1～S10のうち、S1、S2には「楽しく」、S3には「楽しそう」、S4～S7には「楽しさ」、S8～S10には「楽しい」という文言がみられる。これらの記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」、または、C「楽しい授業をしたいととらえていること」を見取ることができる。

S3には「自分の経験も話せる」という文言がみられる。この記述から、H「自分の経験を活かせる」ととらえていること」を併せて見取ることができる。

S6には「英語が好き」という文言がみられる。この記述から、I「学生が、英語が好きであること」を併せて見取ることができる。

S7には「英語免許を取得予定」という文言がみられる。この記述から、H「学生が、中学校の英語の教員免許を取得予定であること」を併せて見取ることができる。

S10には「どの教科でも」という文言がみられる。この記述から、J「外国語活動だけでなく、各教科においても学習することは楽しいととらえていること」を併せて見取ることができる。

S11には「英語を好きになってもらう」という文言がみられる。この記述から、C「英語を好きにさせたいととらえていること」を見取ることができる。

S12には「外国語に興味を持ってもらいたい」という文言がみられる。この記述から、C「英語に興味をもたせたいととらえていること」を見取ることができる。

S13には「中学年くらいならできそう」という文言がみられる。この記述から、I「授業をすることができるととらえていること」を見取ることができる。

S14には「国際理解も入れたい」という文言がみられ

る。この記述から、D「国際理解に関する学習をしたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S15には「英語が話せた方がコミュニケーションをとることができ、社会人になって仕事をするときにも必ず役立つ」という文言がみられる。この記述から、F「英語が話せるとコミュニケーションをとることができるととらえていること」、また、F「仕事をするときを含めて将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

S16には「外国語活動を見て」、「楽しみながら活動をしていた」という文言がみられる。この記述から、G「授業を参観して良いととらえていること」を見取ることができる。

S17には「実習でしたが、楽しかった」という文言がみられる。この記述から、G「授業を実践して良いととらえていること」を見取ることができる。なお、S17には「楽しかった」という文言がみられるが、「楽しかった」の主語は実習生（教員）である。

S18には「専科教師に興味がある」という文言がみられる。この記述から、J「専科教員に興味があること」を見取ることができる。

次に、表8の「ネガティブな意識」について述べる。

S26～S30には「自分の英語力に自信がない」という文言がみられる。S31には「自分の今の英語力で指導できない」という文言がみられる。これらの記述から、b「自分の英語力が不足している」ととらえていること」を見取ることができる。

S32には「日本語でクラスをまとめるのも難しい」という文言がみられる。この記述から、b「自分の英語力が不足している」ととらえていること」を見取ることができる。また、b「その他の力（学級をまとめる力など）が不足している」ととらえていること」を見取ることができる。

S33には「外国語が得意な先生にやっていただきたい」という文言がみられる。この記述から、b「英語が得意な教員に授業を担当してもらいたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S34には「小学校で英語を学ぶ必要を感じていない」という文言がみられる。この記述から、a「中学年の時期を含めて小学校で英語を学習する必要がない」とらえていること」を見取ることができる。

表8 質問項目②の学部学生の記述内容を分類・集計した結果

| 分類 | 学生 | 記述内容 | 人数 |
|----|---------|--|----|
| ○ | S1 | まだ最初であるため楽しく活動できそうだから。 | 1 |
| | S2 | 楽しく英語に親しんでほしいから。 | 1 |
| | S3 | 楽しそうだし、自分の経験も話せるから。 | 1 |
| | S4 | 外国語活動の楽しさを伝えたいから。 | 1 |
| | S5 | 子供に英語の楽しさを知ってほしい。 | 1 |
| | S6 | 英語が好きでその楽しさを伝えられるといいと思うから。 | 1 |
| | S7 | 英語免許を取得予定であり、英語の楽しさを伝えていきたいと思っているから。 | 1 |
| | S8 | まだ英語に対する固定概念が少ないと思うので、英語＝楽しいと思わせられるような授業をしたい。 | 1 |
| | S9 | 初めて英語に触れる子供達が、英語を楽しみと思えるような授業をしたい。 | 1 |
| | S10 | どの教科でも学びは楽しい。 | 1 |
| | S11 | 全員が英語を好きになってもらうような授業をしたいから。 | 1 |
| | S12 | 外国語に興味を持ってもらいたい。 | 1 |
| | S13 | 中学年くらいならできそうだから。 | 1 |
| | S14 | その中に国際理解も入れたいから | 1 |
| | S15 | 英語が話せた方がコミュニケーションをとることができ、社会人になって仕事をするときにも必ず役立つと考える。 | 1 |
| | S16 | 実習に行った時、中学年の外国語活動を見て、楽しみながら活動をしていたから。 | 1 |
| | S17 | 実習でしたが、楽しかったから。 | 1 |
| | S18 | 専科教師に興味があるから。 | 1 |
| □ | S19 | 必要だからするイメージ。 | 1 |
| | S20 | 特別したいわけではないが、やらないといけないから仕方ない。 | 1 |
| | S21 | 楽しそうであるが、英語にあまり自信がない。 | 1 |
| | S22 | 積極的にしたいとは思わないが、実習で悔しい思いをしたことがあるので、いつかリベンジはしたい。 | 1 |
| | S23 | 教えられるほど英語を喋れないから。 | 1 |
| | S24 | 教えられるか不安だから。 | 1 |
| | S25 | 自分の発音にあまり自信がないから。 | 1 |
| △ | S26-S30 | 自分の英語力に自信がないから。 | 5 |
| | S31 | 自分の今の英語力で指導できない。 | 1 |
| | S32 | 日本語でクラスをまとめるのも難しいくらいなので。 | 1 |
| | S33 | 外国語が得意な先生にやっていただきたい。 | 1 |
| | S34 | 小学校で英語を学ぶ必要を感じていないから。 | 1 |

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(2) 質問項目②の若手教員の記述

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をした。」の若手教員の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表9)。なお、表9に示したT1、T2といった教員の番号は表9の中で区別するために付けたものであり、他表の教員の番号と関連していない。

まず、表9の「ポジティブな意識」について述べる。

T1~T4のうち、T1、T2には「楽しい」、T3、T4には「楽しく」という文言がみられる。これらの記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」、または、C「楽しい授業をしたい」とらえていること」を見取ることができる。

T2には「ゲームなどを取り入れた」という文言がみられる。この記述から、J「ゲームを通して学習できる

ととらえていること」を併せて見取ることができる。

T3には「授業を準備することができる」という文言がみられる。この記述から、J「準備をして授業にのぞむことができる」ととらえていること」を併せて見取ることができる。「授業ができる」という意味であれば、要因としてIが考えられる。

T5には「苦手にならないように」という文言がみられる。この記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を見取ることができる。また、T5には「工夫できると思う」という文言がみられる。この記述から、I「授業の工夫改善ができるととらえていること」を見取ることができる。

T6には「遊びの中で」という文言がみられる。この記述から、J「遊びを通して学習できるととらえている

こと」を見取ることができる。また、T6には「興味がある」という文言がみられる。この記述から、J「授業の工夫改善について興味があること」を見取ることができる。

T7には「私がリアクションを取りながら話すなど実際にやってみせる」という文言がみられる。この記述から、I「授業ができるととらえていること」を見取ることができる。また、T7には「外国語への壁をなくすことはできる」という文言がみられる。この記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を見取ることができる。

T8には「異文化への理解」、「深めたい」という文言がみられる。この記述から、D「異文化に対する理解を深めたいととらえていること」を見取ることができる。また、T8には「子どもとともに」という文言がみられる。この記述から、J「教員にとって学びになるととらえていること」を見取ることができる。

T9には「将来、英語で話すことが必要になる」という文言がみられる。この記述から、F「将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

次に、表9の「ネガティブな意識」について述べる。

T13～T15には「英語が苦手」という文言がみられる。T16には「自分の発音では不安」という文言がみられる。

T17には「英語を教えるレベルにない」という文言がみられる。これらの記述から、b「自分の英語力が不足している」ととらえていること」を見取ることができる。

T18には「教える自信がない」という文言がみられる。T19には「できるとは思わない」という文言がみられる。T20には「授業をするのが難しそう」という文言がみられる。これらの記述から、b「授業をすることが難しい」ととらえていること」を見取ることができる。

T21には「授業前後の打ち合わせが大変そう」という文言がみられる。この記述から、c「打ち合わせに時間がかかる」ととらえていること」を見取ることができる。

T22には「教材研究が大変そう」という文言がみられる。この記述から、c「教材研究に時間がかかる」ととらえていること」を見取ることができる。

T23には「空き時間」、「他の業務にあてられる時間」という文言がみられる。T24には「空き時間」、「他の業務をしたい」という文言がみられる。この記述から、c「外国語活動を担当すると空き時間が少なくなるととらえていること」を見取ることができる。

T25には「中学年の担当になるのが嫌」という文言がみられる。この記述から、d「中学年に苦手意識をもっていること」を見取ることができる。

表9 質問項目②の若手教員の記述内容を分類・集計した結果

| 分類 | 教員 | 記述内容 | 人数 |
|----|---------|--|----|
| ○ | T1 | 外国語活動では楽しい授業ができると思うから。 | 1 |
| | T2 | ゲームなどを取り入れた楽しい授業のイメージだから。 | 1 |
| | T3 | 外国語活動の授業は、授業を準備することができるので、子どもたちが楽しく取り組むことができると考えたため。 | 1 |
| | T4 | 楽しく慣れ親しむことができるから。 | 1 |
| | T5 | 苦手にならないように少しは工夫できると思うから。 | 1 |
| | T6 | 遊びの中でどのように言語としての英語を学ばせるのかについて興味があるから。 | 1 |
| | T7 | 私がリアクションを取りながら話すなど実際にやってみせることで少しは外国語への壁をなくすことはできると思っているから。 | 1 |
| | T8 | 異文化への理解を子どもともに深めたいから。 | 1 |
| | T9 | 将来、英語で話すことが必要になると思うから。 | 1 |
| □ | T10 | 英語の授業はやりたいが空き時間がなくなるから。 | 1 |
| | T11 | 外国語に親しむ内容だから。 | 1 |
| | T12 | 去年授業を行ったが、難しいと感じたから。 | 1 |
| △ | T13-T15 | 英語が苦手だから。 | 3 |
| | T16 | 自分の発音では不安。 | 1 |
| | T17 | 英語を教えるレベルにないと思うから。 | 1 |
| | T18 | 教える自信がないから。 | 1 |
| | T19 | 自分がそこまでできるとは思わないから | 1 |
| | T20 | 授業をするのが難しそうだから。 | 1 |
| | T21 | 授業前後の打ち合わせが大変そうだから。 | 1 |
| | T22 | 教材研究が大変そうだから。 | 1 |
| | T23 | 週8時間の空き時間のうち、2時間は他の業務にあてられる時間であるため。 | 1 |
| | T24 | 空き時間は貴重。他の業務をしたい。 | 1 |
| | T25 | 中学年の担当になるのが嫌だから。 | 1 |

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(3) 質問項目②の学部学生と若手教員の記述の比較

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」の学部学生と若手教員の記述内容を分類した結果を比較した(表10)。なお、表10のうち、その他の要因(J, d)については除いて検討した。

表10をみると、学部学生と若手教員では、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因(A~I)のうち、7つの要因(A~F, I)で一致していたが、2つの要因(G, H)で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因(a~c)のうち、1つの要因(b)で一致していたが、2つの要因(a, c)で一致していなかった。

ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因(a~c)のうち、1つの要因(b)で一致していたが、2つの要因(a, c)で一致していなかった。

表10 質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」の記述内容を分類した結果の比較

| 調査対象者 | ポジティブな意識の要因 | | | | | | | | | | ネガティブな意識の要因 | | | |
|-------|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-------------|---|---|---|
| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | a | b | c | d |
| 学部学生 | - | - | ● | ● | - | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | - | - |
| 若手教員 | - | - | ● | ● | - | ● | - | - | ● | ● | - | ● | ● | ● |

記号：表2と表3を参照

●：あり， -：なし

5 おわりに

本研究では、中学年の外国語活動に対する教育学部の学部学生及び小学校の若手教員の意識を調査し、両者を比較した。質問紙で設定した質問項目は、質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」と質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」であった。

選択技法による調査を分析した結果、以下のことが明らかになった。

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」について、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかった。両者を比較したところ、意識に明瞭な得点差がみられなかった。

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」について、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかった。両者を比較したところ、明瞭な得点差がみられ、学部学生の意識が、若手教員の意識よりも高かった。

記述法による調査を分析した結果、以下のことが明らかになった。

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、すべてで一致していた。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、2つの要因で一致していたが、1つの要因で一致していなかった。

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、7つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、1つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。

は3つの要因のうち、1つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。

上記のように、本研究を通して、中学年の外国語活動に対する学部学生及び若手教員の意識が明らかになった。しかし、高学年の外国語科については明らかになっていない。前述したように、高学年の外国語科も、2018年、2019年の移行期を経て、2020年4月から全面実施されている。この高学年の外国語科についても調査・分析を行い、議論する必要がある。

文献

- 田山享子(2021)「小学校教員志望学生における英語学習方略への改善意識-遠隔授業による自学自習形態に関する考察-」, 『共栄大学研究論集』, 第19号, pp.187-200
- 文部科学省(2017)「1 表紙、目次、編成 2 基本編 3 授業研究編 I 外国語活動」, 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)』, 東洋館出版社。